

奥能登に伝わる「暮のいど」あえ

田の神に感謝しつづけて

暮目良雨

奥能登に静かに継承されてきた行事に《あえのこと》がある。平時忠卿が源平の壇ノ浦の合戦に破れこの地に流されて没してから千二百年近く経つが、この一帯に平家の落ち武者のごとく《あえのこと》神事がある。

神事であるが神職は参加しない。行う家々ごとに多少違ったやり方であり、ゴテ（世帯主・ご亭主）が自ら執り行うところに特徴がある。

羽咋出身の棚山波朗さんに引率されて奥能登で行われた二つの《暮のあえのこと》を見聞することが出来た。

文化庁が昭和五十一年に「奥能登のあえのこと」を国指定重要無形文化財に指定した事由を揚げておく。「この行事は、農耕儀礼の典例として奥能登に顕著な分布を示す。各農家における行事次第や内容には細部に違いが認められるものの、ゴテ（世帯主）自らの采配によって収穫後にそれぞれの家に田の神を迎え、饗応して豊穰に感謝し、田の神と共に越冬の春耕に先立ち再び饗応して豊穰を祈願し送り出すという形態が一般的であり、眼前に田の神がいますがごく執り行う所作や直会には、豊穰に対する感謝と願いが素朴なままに発露されている。稲作農耕に従ってきた我が

国民の基盤的生活の特色を典型的に示す事例として極めて重要である。」

平成十九年十二月五日、珠洲市若山町火宮の旧家田

中家で行われた《暮れのあえのこと》はつぎのようなものであった。

暮れのとわざわざ断つたのは《春のあえのこと》もあるからである。この、平家の揚羽蝶の家紋を付ける田中家は（二月九日 春のあえのこと）（二月十日 鍬祭り）（二月十一日 田打ち）（五月上旬 いぶり祭り）（九月上旬 刈上げ祭り）そして（十二月五日 暮のあえのこと）と年間を通して田の神をもてなしている。

《あえのこと》に連なる田の神を祀る稲魂信仰は縄文時代からあったという史家もいるそうだが、ともかく時雨れたり曇りになったり霰が降ったりという能登にふさわしい冬の日和の中を田中家へ急ぐ。とある大きな家に案内された。外に祭らしい飾りものを一切していないので始め何のためかこの家を訪れるのかと訝ったほどである。土間があり暗い寒さの中で靴を脱ぎ板腰障子を開けて座敷に入ると囲炉裏を切つてある座敷と次座敷が開放されていて、先客が二十名ほど静かに座っている。袴姿で囲炉裏の横に座っておられるのが田中家のゴテ田中牛雄さんである。半白の髪の毛の静かな方である。

午後二時に田中家の柱時計が鳴り出すと《暮のあえのこと》が始まった。

田中家では九月の《刈上げ祭り》のときに田の神を神棚に迎え上げているので今日は田んぼまで神様を迎えに行くことはしない。鴨居の上に吊つてある神棚に「繁栄」と「福」と記された切幣が下げられその直下の畳の上に祭の場が設けられている。米俵より小振りな四俵の種籾俵が二俵づつ置かれその上に栗の枝で作った箸が二人分載せられている。その手前に様々なご馳走がこれも二人分用意されている。田の神は厳しい農作業のために盲目になられた夫婦という設定である。

二礼二拍一礼のあと切火が打たれ口上が始まる。「今年は十分な収穫がありました。有難う御座いました。今日はあえの日でございます。ごゆつくりなさつて下さい。」と云つてからさまさまなご馳走を一つ一つ紹介してゆく。

今日十二月五日は旧十一月中の卯の日に当り、新嘗祭の日である。新嘗祭は天皇が新穀を天神地祇にすすめ同時に天皇も親しく食す行事であるが、「暮のあえのこと」がこの日に選ばれた理由には「百姓が贅沢をしてけしからぬ」という非難をかわすことも含まれていたのではないだろうか。田中家の先代の田中福松さんの言葉が残されている。「百姓はお米を加賀藩に上納して取られてしまう。田の神様を祀るようなことをしなければ耐えることが出来なかった。私たちのような高持ち百姓には奉公人がいた。あえのことは、奉公人が終わるまでいってご馳走を一緒に食べたも

のだ」「お米は百姓の口には入らなかつた。田の神の行事を行つたと言うことは、隣が一升のお米を取つて田中が一升二合のお米をとることは出来なかつた」。即ち「あえのこと」を行つて奉公人にご馳走を振る舞つたからこそ良く働いてくれて隣より多くの米を収穫することが出来たという意味であろう。

目の見えない夫婦神のために用意された料理はおおよそ次の通り。大きな木椀に甘酒、二股大根、鰯の切り身、鯛、ハチメと土地で呼ばれる黒眼張、赤眼張の魚、小豆飯、豆腐汁。煮物はジャガイモ、人参、里芋、牛蒡、鯨の炊き合わせ。料理に添えられた太い栗の枝の箸は、勝ち栗ともいわれるように「勝つ」ことの願掛けのために使われている。また、囲炉裏にくべる櫓も栗の小枝である。煙が香ばしく火持ちも良い。

田の神様の食事が済んだとおぼしき頃、白扇の上に二人の神様を載せてお風呂に案内する。風呂場は田中家が今使っている普通のタイル張りの風呂でここでも風呂加減のことを聞きながら背中を流す振りをして心を込めてもてなす。入浴後の神様を炉端の円座にお連れして湯冷めのしないよう栗の櫓をくべてしばらくお暖めしてから再び神棚にお帰りいただく。

この間約一時間。《暮のあえのこと》はまことに静かに終了した。ゴテの田中牛雄さんは祭に先だつて今日は「饗ノコト荒れ」ですぬと挨拶したが奥能登地方はこの日一日中、冬の能登を彷彿させる天候であつた。

田中家では見学の人に料理を振舞うことはしないが能登町にある柳田植物公園の「合鹿庵（ごうろくあん）」で味わう機会があった。それはまさに田中さんの言う奉公人にも振舞ったという「あえのこと」の料理である。めいめいに足付き膳が出され甘酒が振舞われる。膳の上の冷えきった大きなハチメ（眼張）の尾頭付きをつつくの悪戦苦闘しているうちに奥能登の厳しい風土を生き抜いてきた先人の苦勞がしみじみと分かるような気分になっていた。

「合鹿庵」の《あえのこと》神事についても簡

単に触れておく。ここでは田の神を田圃まで行つて榊の依り代に載せてお迎えすることから始まる形を取っている。

長靴（昔は雪沓か）を履いたゴテが曇の降る泥田に入り持参した榊を田に立てて降神して頂く。そして神の依り付いた榊を白扇にお載せして田から館まで導き、炉端でお温めしてから神座にお着き頂き食事のもてなしや風呂のもてなしを行う。このあたりは田中家のものとはほぼ同じである。

この日、白米（しらよね）の千枚田においても「暮れのあえのこと」が行われたという。

能登の荒磯は波の花が崖の上まで舞い上がる寒風の吹きすさんだ一日であった。

暗く寒く魚喰ふ能登の饗のこと 良雨



能登空港を利用した今回の旅は自動車の機動力に助けられて珠洲、曾々木、輪島、南大沢間垣村、門前など広く奥能登の冬の旅を満喫することが出来た。

合鹿庵（ごうろくあん）の暮れのあえのこと 平成19年12月05日



②雪囲の合鹿庵へ迎え入れる



①田から神を迎える



④お風呂に入れる



③ 囲炉裏でしばらく温まっていた



⑥接待の料理の数々。手前は甘酒



⑤湯冷めしないよう囲炉裏で温まる



⑧ご馳走の一品づつを報告



⑦くり、豆、銀杏、白米、二股大根



⑩奉公人も斯くやご馳走に預かったであろう。



⑨風呂は豆殻で湧かす



⑫ 時計回り左上からハチメ塩焼き、鰯の刺身など、甘酒、小豆飯、中段 膾、煮染め



⑪ゴテ（ご亭主）を中心に頂く

その他作品

あえのこと荒れとや時雨音たてて 棚山波朗
炉に爆ぜる栗の生木や響のこと 池内けい吾
栗のほだ爆ぜて静かにあえのこと 暮目良雨
湯上りの神に囲炉裏の生木爆ず 柚口 満
自在鉤の紋も揚羽やあへのこと 武田孝子
田の神を迎ふ袴能登時雨 倉林美保
湯上りの田の神へ炉火燃えたたす

飯田眞理子

坂下草風

沢ふみ江

杉坂大和

中島八起

前川みどり

田の神を祀る座敷へ炉の煙

すぐ乾く朝市通り能登時雨

寒風に畦の細りし千枚田

地震の跡残る灯籠芽水仙

村ひとつ風囲ひして住み古りぬ

七つ島跨いで架かる冬の虹

茶木喜代一



能登荒磯



波の花



田中家ゴテ



揚浜式塩田